「真の愛の起源地」に関して(2)

韓国統一思想研究院院長　李相憲

(3) 異性の愛

①異性の愛と宗教

異性の愛とは、男女の愛をいうのはいうまでもないが、この愛の力によって、一組の男女は結婚し、夫婦となって、家庭を形成し、子女を繁殖する。このような男女の結合は単純な生物的結合ではなくて、愛による人格的結合であるために、古来から多くの宗教では男女の結合を神聖視または尊重視し、一定の宗教的儀式にしたがって結婚行事を行ったのである。

ユダヤ教、キリスト教、仏教、儒教、イスラム教、インド教等、それぞれ特有な儀式をもって新郎、新婦を結びつけたのであった。ところでこのような宗教儀式による結婚は、始めから問題点が内包されていた。それは教理上の理念と儀式上の理念との不一致、または教理上の男女観と実際の結婚生活での男女観との不一致である。

②各宗教教理の結婚観の理念と実際

例えばキリスト教においては、イエス様は「わたしは神から出た者［であるが］……あなたがたは悪魔から出てきた者であって、偽りの父の後孫である」といい（ヨハネによる福音書八章四二～四四節）、「家の者が、その人の敵となるであろう」（マタイによる福音書一〇章三六節）ともいい、使徒パウロはできるなら独身生活をした方がよいと勧めている（コリント人への第一の手紙七章七～八節）。これはイエス様や使徒パウロが世俗的な結婚をよしとしないこと、すなわち認めていないことを意味する。

ところがイエス様は、パリサイ人たちが、「何かの理由で、夫がその妻を出すのは、さしつかえないでしょうか」と問うたとき、「神が合わせられたものを、人は離してはならない」と答えている（マタイ一九章三～六節）。ここにイエス様の家庭観に前後矛盾があるのを見ることができる。キリスト教の結婚儀式は、後のイエス様のみ言によっているのであるが、そこに問題があるのである。

次に仏教の場合を見てみる。釈迦は一切衆生は皆仏性があるために、男女は互いに愛して、結婚し、夫の道理、妻の道理を尽くしながら家庭を形成することを教えている。

しかしまた一方では、異性に対する愛を渇愛や愛欲といいながら、物欲と共に捨てねばならない色欲として取り扱ってきた。古来から、修道僧たちが入山修道する理由の一つも、この愛欲を断つためであった。多くの僧たちが今日もなお、比丘僧、比丘尼として、仏教の伝統的な規則を守っているのをみる。

このようなことは儒教においても同じである。三綱でいう「夫為婦綱」は、夫婦が守らねばならない道理であるが、それが正に五倫の中の夫婦有別、すなわち夫と妻が守る人倫に区別がなくてはならないという意味である。すなわち男は人倫の主体であり、女は人倫の対象という意味であって、格位上において差があるのである。しかし愛においては両者は平等なのである。

ところで実際の家庭生活において、権利は男だけに与えられており、女には従順と義務だけが要求されている。その甚しい例が、女に強要される七去の悪（夫のもとを去らねばならない理由としての七つの悪）や一夫従身等の封建的人間差別なのである。すなわち儒教においても、名分上の理念と実際は一致しないのであった。

次に回教の場合を調べてみる。回教も儒教のように結婚を重視し、コーランには、結婚に関する規定が詳細に書かれている。そして遺産相続権等も定められている。しかし男にはより多くの権利、例えば一般的な離婚の権利、一夫多妻婚の権利まで許されている。

最後に、インド教について調べてみることにする。インド教では、教理上では男女間の愛（性愛、Kama）を、法

(Dharma)と財産(Artha)とともに、人生の三大目的の一つとしているほどに、そして一部の教派では、性器崇拝（男根崇拝、女陰崇拝）が行われるほどに、性愛や結婚を神聖視している。

しかし実際において、結婚のこのような神聖性はカースト制（階級制）によって大きく妨害を受けている。貴族階級の男子と農民階級の女子がいくら熱烈に愛し合っても、決して結婚は許されない。性愛（異性愛）が「人生の三大目的」の一つであるにもかかわらず、カースト制によって人生の目的の一つが無視されているわけである。

③近代以後の女性解放運動とその結果

以上、指摘したような、結婚観における教理上の理念と実際との不一致、すなわち女性に対する人間的差別待遇は、封建社会においては、領主と農民の主従関係の影響により、いっそう加重されてきた。

ところが、産業革命を前後して起った十七～十八世紀の啓蒙運動の権利平等思想の影響を受けて、一部の女性の先駆者たちによって、女性の権利平等思想が主唱され始めた。その後、平等思想を内容とする女性解放運動が台頭し、次第に拡大されてゆき、二十世紀に入って、広範な国際運動にまで発展した。

このような女性解放運動は、キリスト教文化圏であるヨーロッパで始められ、それぞれ程度の差はあるが、極東文化圏、回教文化圏、インド文化圏にまで拡散されたのである。これは何を意味するかといえば、長い間、宗教が教理上では女性を重視し、一部の宗教では権利も与えていたが、現実的には、差別待遇または卑しめが長い間継続してきたために、それに対する女性たちの積り積った不満がついに表面化したことを意味するのである。

この女性解放運動の目標は、女性の地位向上、男性との権利の平等、機会の均等等であった。その後、この運動の一部は、社会主義運動とも結合して、真の女性解放はプロレタリア革命によってのみ可能であるという、社会主義女性解放運動の分派をも形成したのである。

このような運動の影響を受けて、資本主義国家と社会主義国家で、女性解放運動の要求が少しづつ法律に反映し始め、ついに第二次世界大戦の後には、女性たちの要求を全面的に法律に反映させたのである。このようにして女性の地位向上、男性との権利平等、機会の均等等が法律的に保

証されるようになった。

ところで六〇年代後半に至り、新しく女性問題が再び提起された。法律では男女平等が達成されたが、現実的にはそうではなかったからである。すなわち政治における投票権、被選挙権、教育における機会平等が現実的に実現されただけで、そのほかに就業や待遇において、女性たちはいぜんとして差別を受けていたのである。

すなわち就業において、会社の社長や幹部職はほとんど男性が占めていたし、女性には秘書、タイピスト、スチュワーデス、清掃婦等が与えられているだけであって、待遇（例えば労働賃金）において、差別がある場合が多かった。

そればかりでなく、法的には男女平等が保証されたが、予想外の新しい問題が発生したのであった。女性の男性への不従順、権利の主張による夫婦の対立、夫婦の相互不信、相互嫌悪、男性の他の女性との不倫行為、女性の他の男性との不倫行為等がそれである。

そのようにして離婚率の増大とともに、家庭崩壊が頻繁に起るようになった。それは社会主義国家においても同じであった。女性解放のために公娼制度は廃止されたが、結局は、男娼まで含めた私娼の増大という、とんでもない結果をきたしたのである。このようにして六〇年代後半に、女性解放問題が再び新たに台頭したが、何らの成果なしに、うやむやに消えてしまった。

このようにして女性解放運動は結局、失敗してしまったのである。しかし、これは近代及び現代のすべての改革運動の失敗の一環に過ぎないのである。近代に至り、資本主義の発達とともに招来された各種の社会的矛盾と病弊、増大する社会的犯罪等を除去するための運動が、今日まで、多くのところでいろいろな形態で展開されたが、結局はみな失敗してしまったのである。

各種の思想運動も、多くの宗教運動も、一時的な成功を収めただけで、結局はみな失敗してしまったのである。これをお父様は次のように表現された。「共産主義も、民主主義も、キリスト教も、仏教も、回教も、儒教も、みな実験済みである。すべてが失敗に終った」。

実験済みとは何の意味であろうか。それはサタンや人間たちが、神の力を借りないで、自分たちの力ですべての難問題を解決してみたいというので、神は失敗することを知りながらも、「悪の量が満ちる」ようにするために、彼らの要求を許したことを意味すると同時に、結局、神が予想

したように、その試みが失敗に終ったことを意味するのである。

女性解放運動も同じように実験済みなのである。神の助けなしに、自分の力で女性解放をしようというので神は許したが、それもやはり失敗に終ったのである。このようにして今、サタンも、人間たちもすべてを断念して、自力でやろうという傲慢性を捨て、謙虚に神の力に頼らざるをえなくなった。したがってもし、まだ難問題の根本的な解決を自らの力でやろうとする指導者があるとすれば、彼は物事の分別を知らない蛮勇家だと言わざるをえないであろう。

(4) メシヤの出現と神の真の愛

このようにして人類の深層心理は、今日、すべてを断念して、天からの救いの手を待っている状況となったのである。そのような時に、ついに再臨のメシヤが出現された。その方が正に今回モスクワ大会を成功させ、無神論の最高位にあるゴルバチョフ大統領を自然屈伏させた文鮮明総裁であられるのである。

総裁様は今回のモスクワ大会に、神の指示により再臨のメシヤの資格で行かれ、世界人類の前に再臨のメシヤとして出現されて、その第一声を発せられた。それが正に原理の宣布であり、神主義の宣布であった。文先生は同宣布で、共産世界、自由世界を問わず、現実の諸問題を根本的に解決する道は、神を受け入れて神の真理を学んで、神の真の愛を実践することであると強調されたのである。

モスクワ大会を大勝利に終えて故郷に錦を飾られた後、再び全国十二カ都市で開かれた「モスクワ大会勝利及び真の父母様歓迎大会」にすべて参席されて、今度は再臨のメシヤとしてのみならず、人類の真の父母として登場されて、総勢三〇万の群衆の前で、再び神主義を宣布されながら、神の真理を学び神の真の愛を実践することを訴えられたのである。

続いて、朴普熙社長が登場して、人類が待ちこがれていた再臨のメシヤ、人類が受け入れなければならない真の父母様が正にこの場所に臨席しておられると宣布するや、満場の万雷の拍手喝采とともに、引き続いて叫ばれる万歳三唱の喚声が天地を震わせたのである。

このようにしてモスクワ大会と、十二カ都市における真の父母様歓迎大会の期間は、実に天地開闢が成される歴史

の大転換の時であったのである。したがってこの期間に下されたみ言は、将来、千秋万代に財宝として残されるであろうし、それゆえ、み言に対する十分な理解がまた切実に要求されるようになった。特に神の真の愛に対してそうである。それで次にこの「神の真の愛」を「異性の愛」と関連させて考えてみることにする。

(5) 神の真の愛と異性の愛

①神の真の愛と現実問題の解決

既に述べたように、愛には原理的な愛と非原理的な愛、真の愛と偽りの愛があるが、原理的な愛と真の愛は神の愛であり、非原理的な愛と偽りの愛はサタンの愛である。

したがって、お父様がモスクワ大会や真の父母様歓迎大会で現実問題の根本的解決のために、神の真理を知り、神の真の愛を実践するように訴えられたのは、「今日まで、人間が神の真の愛をもって問題の解決に臨まなかったので、様々な現実問題の解決に失敗した」ということを悟らせるためであったのである。

今日まで、解決しようとして失敗した現実的問題はあまりにも多い。貧富の格差の問題、南北問題、人種紛争、国境紛争、宗教紛争、共産主義問題、宗教統一問題、貿易摩擦問題、住宅難問題、公務員の不正腐敗、殺人、強盗、放火、破壊、犯罪の増大、麻薬中毒、アルコール中毒の増大、性的暴力、近親相姦、淫乱の蔓延、青少年凶暴化傾向等が一つも解決されずにいるのみならず、深刻性を増しつつある。

そのほかにも、個人の問題、家庭の問題をはじめとして、政治、経済、産業、教育、行政、芸術、言論、出版等の分野にも、解決しなくてはならない問題等が無数にある。女性解放運動も、その中の一つなのである。

このように現実的問題が解決されずに残されたのは、神の真の愛をもって問題解決を図らなかったからである。既に述べたように、それは神を差しおいて知識、金、技術、経験、知恵、力（物理的力）等だけで解決しうると信じた人間たちの傲慢性のためである。

今や、世界の指導者たちは謙虚な心でメシヤを迎えてその教えに耳を傾けながら、先頭に立って神の真の愛を実践すべき時に至ったのである。神の真の愛のみが、上述のすべての問題を最も完璧に解決することができるからであ

る。完璧な解決とは、いったん解決されれば問題が再び再発しないというような解決である。

②異性的愛と原理的な愛

つぎは異性の愛に関して説明することにする。異性の愛とは、男女間の性的愛である。ところで既に話したように、愛には原理的な愛と非原理的な愛があり、真の愛と偽りの愛がある。原理的な愛、真の愛は神の愛または神を中心とした愛であり、非原理的な愛、偽りの愛はサタンの愛またはサタン中心の愛である。

このような区別は異性の愛にもある。サタン中心の異性的愛は非原理的な偽りの愛であり、神中心の異性的愛は原理的な愛、真の愛なのである。原理的な愛、真の愛としての異性の愛は、もっぱら結婚した後の神を中心とした男女の愛、すなわち夫と妻の愛だけである。夫婦以外の男女関係は、原理の世界においては、ただ同じくらいの年令にある兄弟姉妹の関係だけである。

本然の原理世界では、愛の秩序が厳格に守られるようになっている。すなわち、家庭において祖父と祖母、父と母、息子とその嫁等、各代の夫婦の間にだけ異性の愛（すなわち性行為）が成立し、父母と子女の間、兄弟姉妹の間には、決して異性の愛がありえない。ただ父母の愛、子女の愛、兄弟姉妹の愛があるだけである。そして夫が他の女と交情するとか、妻が他の男と密通することも絶対にありえないのである。これが愛の秩序である。

この家庭の愛の秩序を破壊したのがサタンである。サタンがアダムの配偶者となるはずのエバを非原理的な性的愛で誘惑して、堕落させたのは、正に天道の秩序を破壊したのであった。これを出発点として、今日まで六〇〇〇年間、サタンは継続して家庭の秩序を破壊してきた。紀元前五～六世紀ごろから、このような破壊された家庭秩序を収拾するために、神は聖賢たちを立て、宗教の教えを与えて人間の精神を指導してきたが、今日に至るまで完全に収拾されていない。

そのゆえに、メシヤが再び来られるようになるのである。今日の淫乱行為、性的暴力、近親相姦、各種の堕落行為等は、すべて愛の秩序を破壊する行為であって、例外なく、非原理的なサタンの愛であり、偽りの愛なのである。

（つづく）

二　新福音主義

既に我々が見てきたように、新正統主義は第一次世界大戦の困難によって興ってきた。ほとんど同じようにして、新福音主義は一九五〇年代後半から一九六〇年代の社会的問題に応じて興ってきたのである。[19] 具体的な幾つかの理由としては、次のようなものを挙げることができる。

①共産主義の絶えざる拡張によって、多くのアメリカ人が自らの中流階級的な生活が脅かされていると感じ始めたことである。韓国動乱は勝利を得ることなく膠着状態のままで終わってしまった。さらに、もっと身近な所でキューバが共産化されてしまった。それゆえに、世界の力を指揮するというアメリカの役割は大きく疑問視されるに至った。

②市民権についての論争はアメリカを二分した。多くのキリスト教信徒は、キリスト教の主流派に属する神父、修道女、牧師、神学校の教授たちが、学校やレストラン、その他の公共施設からの人種差別撤廃を支持して南部に向かって行進したのを見て困惑した。暴動が起きたときでさ